

ジャン＝ジャック・ルソー像の揺らぎを求めて：在外研究資料外観

阿尾, 安泰
九州大学

<https://doi.org/10.15017/10043>

出版情報：Stella. 20, pp.91-104, 2001-09-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ジャン＝ジャック・ルソー像の揺らぎを求めて

—— 在外研究資料概観 ——

阿 尾 安 泰

2000年6月から2001年3月にかけて文部省在外研究により、ジュネーブ、パリでジャン＝ジャック・ルソーに関する調査を行うことができた。収集した資料の綿密な分析は後日に譲ることにして、今回はそれらを概観するにとどめ、研究の今後の可能性を考えてみたい。探索を行った主な場所は地域ごとに、以下のように分類できるだろう。

1. Genève

- a) Institut et Musée Voltaire
- b) Université de Genève
 - b-1. Bibliothèque de la Faculté de Lettres de l'Université de Genève
 - b-2. Bibliothèque Publique et Universitaire
- c) Archives d'État

2. Paris

- a) Bibliothèque Nationale de France
- b) Bibliothèque de la Sorbonne
- c) Bibliothèque Histoire de la Ville de Paris
- d) Bibliothèque de l'Arsenal
- e) Musée Jean-Jacques Rousseau

調査の大きな目的はルソーの作品『グランベール氏への手紙』に関する資料を集めるとともに、ヨーロッパ近代化のプロセスを考察することであった¹⁾。ルソーのこの作品に注目したのも、従来のルソー像に新しい光を与えてみたい

と思ったからであり、安定しているかに思える見取り図に揺らぎを導入することを考えたからである。これまでフランス文学・思想の枠の中に置かれて分析、研究されてきた対象を別のコンテキストで論じる。そこで、ふたつの方向からのアプローチを想定した。空間的展開と主題的展開である。

空間については、フランスという空間的限定を、パリ、ジュネーブの2極関連構造に転換する。実際ルソーはパリを主たる活動の基盤としたかに見えるが、絶えず自らの出自たるジュネーブを意識しており、ふたつの文化圏の対立、葛藤の中から、執筆活動の力を引き出していった。具体的には、『グランベール氏への手紙』創作前後のジュネーブにおける資料を探索することで、フランス側の文献と比較研究するための準備を行った。スイス側のテキストがフランス中心的研究方向に新たな光を与えてくれることを期待したのである。

主題的展開についていえば、文学、思想といったそれぞれの分野の中に収められて各領域ごとに論じられてきたルソーの営為を、ジャンル横断的に考えていこうとする試みである。『グランベール氏への手紙』においても、演劇を論じるという文学的なスタンスが、論述の過程において共同体のあり方を問う政治的な姿勢へと広がっていく。問題領域を分断するのではなく、相互に連関、接合させていくようなルソーの志向、そうした観点を生む時代背景を考えたい。様々な領野の交錯、連結から構成される18世紀のダイナミックな言語文化空間を対象とする。具体的には、パリにおける歴史資料の探索が、複雑な時代情勢を明らかにしてくれるであろう。

1. ジュネーブの資料探求——空間的な拡大を求めて

a) Institut et Musée Voltaire

Institut et Musée Voltaire 附設図書館の膨大な資料を前にして、図書館司書との話し合い及びアドバイスを通じてキーワードによるコンピューター検索を実行してみることにした。特に最近の研究資料については、データベースが充実しているので、有効な情報にヒットしやすいというわけである。

これまでルソーをジュネーブという文化圏の中で捉えてみたいという意向を持ってきた。そこで比較項を導入することを考えた。ヴォルテールである。ジュネーブを絶えず念頭に置きながら、パリで主たる活動を展開していったル

ソーに対し、フェルネーを基盤として次第にジュネーブに影響力を及ぼしていくフランスの大御所の動きを追ってみようとしたのである。こうして、ルソー、ヴォルテール、ジュネーブという3つのキーワードが登場した。この関係を分析する中で、さらに1項を追加することで、研究領域の拡大ができないものかと思っていた。

コンピューターによる探索は、あらたな要素を示した。当時のジュネーブの知識人社会において大きな影響力をもつ人物として、聖職者のジャコブ・ヴェルネの存在が浮かび上がったのである。ガーネットの研究がその導きとなった²⁾。この研究は、ヴェルネの生涯を追うものであった。その過程でジュネーブの演劇を巡る問題が現れ、ヴォルテール、ルソーという大物が介入してくる。そうした動きが、この2人の偉人に引きずられることなく、ジュネーブという都市のコンテクストとともに分析、考察されていく。この研究書により、後述のデュ・パンの書簡集、ルソーとヴェルネの往復書簡および Archives d'État における資料の存在に気づくことができた。18世紀ジュネーブ社会のあり方を知る上でも、大きな収穫を与えてくれたと言える。

b) Université de Genève (<http://www.unige.ch/>)

最近のルソー研究の調査と併行して、18世紀当時のジュネーブの歴史的、社会的、政治的状况を示す資料の探索を進めていった。学部の図書館は開架式であるために、*Correspondance littéraire*などを自由に閲覧することができた。またルソーと同時代人であるマルモンテルの全集なども参考にすることができた³⁾。

ただ重要な資料については、B.P.U. (Bibliothèque Publique et Universitaire) に多くを頼ることになった。ルソーの『ダランベール氏への手紙』の反論として書かれたダランベールのテキストも見るができる⁴⁾。これにより、ルソーとダランベールの意識の差異が読みとれる。他にも重要な歴史的資料があって、当時のジュネーブ社会における問題の所在を教えてくれる⁵⁾。

B.P.U.をはじめとする図書館および前述の Institut et Musée Voltaire などには相互にオンラインで文献の収蔵状況を伝達しあっていて、研究者は効果的に文献を探索することができる。さらに広い範囲でのフランス語圏スイスにおける図書館の収蔵状況もインターネットで検索が可能である (<http://www.>

unige.ch/biblio/etudiant/opac.html)。

また、ルソーに対抗しながらジュネーブへの働きかけを展開したヴォルテールについても、ジュネーブ側に興味深い研究文献がある。ヴォルテールの活動がジュネーブの人々から、所属の階層ごとに異なった目で見られていたことがわかる⁶⁾。

また当時のジュネーブの状況を、18世紀の刊本により、具体的に辿ろうとするときには、図書館3階の参考閲覧室にある18世紀ジュネーブ文献目録が大いに参考になる⁷⁾。ただ当時の状況をより微細な形で見るとするには、同じ階の奥にある手稿資料閲覧室を訪れることになる。その収蔵資料の中にデュ・パンの書簡集がある。当時のジュネーブ法曹界で重要な地位を占めるデュ・パンの書くものには、この地域の上層階級の意見が反映されているとみることができよう。書簡集は、以下の点について重要な情報を与えてくれる。

- (1) 18世紀のジュネーブの一般的社会情勢
- (2) 18世紀の文学、思想の状況
- (3) 18世紀の政治状況
- (4) 演劇を巡る問題の変遷
- (5) ジュネーブ聖職者たちの活動
- (6) ヴォルテールの活動
- (7) ルソーの活動

この資料により、ジュネーブにおける演劇問題の経緯や、『ダランベール氏への手紙』の背景にある状況について、貴重な示唆が得られる。特に研究の参考になる部分は、資料のMS 1539 (1755-1759 : 95 lettres, 3 annexes), MS 1540 (1759-1764 : 86 lettres), MS 1541 (1764-1765 : 50 lettres) である。またこの資料を読み解く上で、シャピュイザの研究は優れた導き手となる⁸⁾。

ジュネーブの演劇問題において、聖職者が大きな役割を果たしていたことを思えば、前述のヴェルネの重要性も明らかとなる。B.P.U.においてはヴェルネ関連の書簡集も収蔵されている。その中には、ルソーとの関係において新たな地平を見せてくれるものが存在し、*Sentiment d'un citoyen* を巡る事件が大きな論争点となったことがわかる。そうした係争を通じて、ルソーの著作の独自性と様々な解釈の衝突の問題を考えることができるだろう⁹⁾。

c) Archives d'État

デュ・パンの資料が、その重要性にもかかわらず、ジュネーブ上層階級に属する彼のイデオロギーのフィルターを通したものである限り、特殊性を別の文献とつきあわせることで、独自の傾向を修正する必要があるだろう。別の視座を提供するものとして、Archives d'Étatに収蔵されている文書が大いに参考になる。この施設は、ジュネーブ市庁舎近くにあつて、旧武器庫を資料収蔵のために改造したものである。登録により、貴重な古文書を館外閲覧は許されないものの、館内において継続して自由に研究することができる。

特に重要な資料としては、*Registres du Consistoire*, *Registres de la Compagnie des pasteurs*があつて、ジュネーブの一般的社会情勢や演劇問題をめぐる事態を、デュ・パンの視点とは違った形で知ることができる。状況の中で、いかなる政治的判断がなされたかも具体的な形でみることができる。デュ・パンの書簡がジュネーブの進歩的、親フランス的な立場を表しているとなれば、この古文書資料集はむしろ聖職者や施政者の姿勢を伝えてくれるものとなっている。そうした複合性がジュネーブという都市国家の特殊性を示しているとも言える。『ダランベール氏への手紙』関連の参照する資料は具体的には、*Registres du Consistoire*についていえば、R 85 (1748-1755), R 86 (1755-1761), また*Registres de la Compagnie des pasteurs*に関しては、R 26, R 27 (1751-1756), R 28 (1757-1760)が対象となる。当時の事件の記述と合わせて、それに対する対応が細かく記載されていて、18世紀のジュネーブ社会の状態を知る上で、貴重なものとなっている¹⁰⁾。

2. パリの資料探索——主題的拡大を目指して

ジュネーブでの調査が、この都市における文化空間の多様性の解明を通じて、ルソーの作品を開いていこうとしたのに対し、パリでは、文学、思想というジャンルの制約を越えるようなルソー研究の可能性を目指した。具体的な方向としては、当時の演劇というジャンル規定を時代のコンテキストの中から捉え、同時に『ダランベール氏への手紙』執筆の頃に生じたダミヤンによる国王暗殺未遂事件をその出来事がまきおこしたイメージとともに考えていこうとしたのであった。

ふたつの方向からルソーの活動の特殊性を浮かび上がらせようとした。ひとつには、彼が身を置いた時代の演劇論のコンテクストを確認した上で、そうした傾向とは一線を画そうとするこの思想家の態度を読みとることを考え、もう一方では様々な問題が領域を越えて横断的に結びつきながら形成していくエピソードとの関係からルソーの営みを測定することを目指した。演劇は決して文学的な事象にとどまるものではなく、またダミヤン事件も政治的、社会的な影響力だけでなく、文学、哲学、芸術的な次元の表象形成能力のレベルに大きなインパクトを与えていることを確認していきたい¹¹⁾。

a) Bibliothèque Nationale de France (<http://www.bnf.fr/>)

ルソーの時代の演劇というジャンルが持っていた特殊性を判断するために、当時の演劇の理論書およびそのもとになった17世紀の著述をまず第一に参照することにした。18世紀に向かう演劇論の流れの中で、17世紀の文献としては、やはり、演劇に批判的な立場を取るボシュエ、そして彼が対抗しようとしたカファロの名を挙げないわけにはいかないだろう¹²⁾。

ただ両者はその立場上、議論の中心点を宗教的な基盤に求めて、演劇に関する意見を述べている。そうした傾向も18世紀になると議論の重点が宗教的な次元から新たな方向へと移っていく。演劇というジャンルの特殊性、自立性を考えながら、観点を美学的な展望へと開いていったのが、デュ・ボスである¹³⁾。

こうして演劇問題がより世俗的な形で議論されていくようになっていった。作品に密着した形での議論、また演じるという立場からの論考も現れてくる¹⁴⁾。同時に芝居を見るという独特の体験に基づいて、この芸術を観客という視点から論じる者もいる¹⁵⁾。

基本的には進歩的な立場に属する人々の意識は演劇擁護に向かっていった。そうした中で、ルソーが、時代の流れに批判的な立場を表明したことは、大きな波紋を巻き起こした。もちろん、前に述べたように、グランベールもルソーに対抗する意見を述べた。彼以外にも、ルソーへの批判を表明した人々がいた。ただこうした意見は主として、文学的美学的な立場からのものであり、ルソーのテキストが志向した、共同体の存立の基盤をめぐる政治的なレベルにまでは、届いていないように思われる¹⁶⁾。

b) Bibliothèque de la Sorbonne

ここでは、登録をすれば、館外貸し出しが可能である。最近のルソー研究書および18世紀のテキストのリプリント版および現代の新訂版などを多く揃えてあるのが貴重である¹⁷⁾。

また最近では、各大学間をオンラインで結ぶコンピューターによる検索が可能となり、文献の調査にも役立っている。もちろんB.N.F.にも容易にアクセスできる。

ただそれにもまして、ダミヤン研究で導きの光が得られた。最近のダミヤン研究の中で大きな成果であるレタ編集の研究書がここに収蔵されていたのである。この研究書は、多くの研究者たちを動員しながら、膨大な資料の探索、調査をもとに、多くの新しい見地を示してくれた。さらにそこに付された綿密な参考文献、および資料は、今後の研究に対する、多くの可能性と詳細な情報を与えてくれる¹⁸⁾。

c) Bibliothèque Histoire de la Ville de Paris

ダミヤンの資料の探索において、この図書館をはずすわけにはいかない。登録により、貴重な文献を閲覧することができる。

ダミヤン事件にアプローチするに当たっては、最近の諸研究を参照するのがわかりやすい道となる。前述のレタの他にヴァン・クレ、シュヴァリエのものがここに収蔵されている¹⁹⁾。

ダミヤン事件の公的な資料としては、ル・ブルトンのものがある。細かな審理の様子、ダミヤンの生涯の記録、そして処刑の詳細が記載された大部なものである²⁰⁾。またダミヤン関係の資料は、後述のArchives de Bastilleにも含まれているが、その原資料の一部を活字化したものとして、ラヴェソンの労作がある。特に注目すべきは、16巻と17巻である²¹⁾。

ダミヤン事件の重要性は、そこから様々なテキスト群を誘発的に生み出されていったことからわかる。たとえばダミヤンの手によって傷ついた王を歌った詩群の中でも、有名な2作品がこの図書館に残されている²²⁾。謎の多いこの事件は、その背後関係を巡って、数々の議論を呼び、いくつかの論述が生まれていった。というのもこの企てが、宗教問題に端を発した王権と高等法院を巡る権力闘争の時期に起こったからである。ダミヤンの共犯という問題が浮上し

てくるのである。不安定な状況下で発生した異常な出来事に人々は、その解釈を求めて、様々な可能性を模索した²³⁾。

ダミヤンその人の生涯の中に解決の糸口を見ようとする者は、彼の一代記の構成に向かうであろう。そして様々な情報は当時発達しつつあった国際的なメディアを通じて、フランス以外の地にも伝わっていく。情報の伝達のメカニズムの伸展もこの時代の大きなテーマとなろう。情報が様々なイメージを喚起しながら、表象文化圏を構成していくのである²⁴⁾。

d) Bibliothèque de l'Arsenal

この図書館はダルジャンソン侯の屋敷を図書館にしたもので、大きくはないものの、落ち着いた趣を見せている。現在では、演劇関係の資料を多く収蔵しているようであるが、もちろんバスチーユ関連の原資料はここに保管されている。閲覧希望時に手稿資料研究の旨を告げると、専用の席を確保してくれる。ただし、箱に入った大部の手稿群は一度に一箱の閲覧が許されるだけであり、請求時に正確な蔵書整理番号を記載することが要求される。

ダミヤン関係の資料については、すでに述べた研究書およびラヴェソンの資料集などによると、ここにはふたつ存在することがわかる。N°11979とN°12498である²⁵⁾。特に前者は総数618枚にも及ぶ書類がひとつの箱に収められている大部のものである。ただその膨大な数のわりには、ダミヤンその人およびその家族に関するものは多いとは言えない。それは逆に言えば、ダミヤン事件の及ぼした影響の大きさを示している。事件発生後、司法および警察当局は、大規模な捜査を展開した。犯人ダミヤンの動機の解明と彼の背後関係および共犯者の探索が、主な目的であったと思われる。そのために、あらゆる情報が、その微細さにもかかわらず、集められ、そこから容疑者を検挙する場合もあった。この暗殺未遂事件により、社会の揺らいでいる部分がより鮮明な形で浮かび上がってきたのである。犯行後の経過の中で、国王への不敬罪の嫌疑がかけられる者、また不安の中で流言飛語を流す者、また偽証により連行される少年といった姿が現れる。そこに時代の揺れを感じることができるだろう。

そうした資料以外にも、当時の人々が事件をいかに受け止めて生きていったかについては、各種のGazetteに窺うことができる。ここには当時の主なものが3種ほど収蔵されている。*Annonces, affiches et avis divers, Gazette*

d'Hollande, Gazette d'Utrecht である。*Annonces...* については、主として国内のニュースを知らせる色彩が強く、パリおよびフランス各地の反応を伝えてくれる。特に、国王の健康回復後各地で催される祝賀式典の様子が紹介される。*Gazette d'Hollande, Gazette d'Utrecht* はヨーロッパのほぼ全体に及ぶ情報網を展開し、各国のニュースを知らせるものである。言い換えれば、ヨーロッパ的なコンテキストでこの事件を見ることができる²⁶⁾。

e) Musée Jean-Jacques Rousseau (Bibliothèque d'études rousseauistes)

パリ郊外のルソーゆかりの地、モンモランシーに Musée Jean-Jacques Rousseau がある。その付属の研究施設として Bibliothèque d'études rousseauistes が併設され、貴重な資料を有している。ここには世界各国からのルソー研究が集積されている。図書館司書とのコンタクトにより、より有効に情報にアクセスできるようになっている。また B.N.F. 収蔵のルソー関連の資料の一部もマイクロフィッシュでコピーされ、収蔵されている。

ここでは、『ダランベール氏への手紙』関連の研究論文、および最近のロックを中心に調べるとともに、18世紀原資料を探索することとした。『ダランベール氏への手紙』関連では、雑誌論文を中心に調べることとした²⁷⁾。

ただ何よりも発見であったのは、ベティシの本であった。ルソーの演劇論に対する反論の書である。ただその反論の仕方が文学的な方向というよりも、当時の感覚論的な思想を踏まえたものである点が、他の類書に見られない興味深い所である。こうした観点からの反論の書を検討することで、18世紀という時代像が明確になるとともに、ルソーの独自性が明らかになっていくように思われる²⁸⁾。

3. 今後の展開に向けて

以上資料について述べてみた。もちろんそれをどう使っていくのかは今後の課題である。ただその方向の可能性をいくつか示唆して、本論を終えることにしたい。

(1) 文化空間における多層的な境界線——ジュネーブ、フランスという地理的な境界線分けは事態を単純化する恐れがある。実際ジュネーブのインテリ上

層部はほぼフランスの貴族層と同じような文化的基盤に立脚していたからである。デュ・パンのヴォルテールへの尊敬はその現れであろう。逆に聖職者層はそうした文化に批判的であったと思われる。そしてその批判を通じて、聖職者層の一部と上層部の支配に対抗する反政府グループとが結びつき、ジュネーブの中で階級闘争を行うこともあった。この時代、固定的な視点は事態の複雑さを見落とす危険が大きい。

またもちろんフランスにおいても、貴族階級の視点が庶民たちのものとは重なりあっていないことも事実である。そうした観点の錯綜の状況の中で生じた大事件がダミヤン事件であり、それゆえに司法、警察当局も解決に全力を尽くしたのであった。逆に言えば、そうした混沌の中で事件を円滑に処理していくことで、破局の乗り越えの榮譽と秩序再構築の連帯の輪を作り出そうとした節がないわけでもない。王の全快を祝う祝典が数多く各地で開催されることの重要性もそこにあるかもしれない。

(2) 文化という枠——文化空間がコンテキストを持って成立する以上、その文化的な枠組みというものは決して無限定なものではない。普遍的とされる価値観にも限界が現れてくる。デュ・パンのヴォルテールによせる尊敬も、彼がある立場を越えると消えていくのである。このフランスのインテリがスイス的なコンテキストに合わないことをし始める時、距離が生じる。別荘の管理の仕方などなら些細な批判ですむが、ヴォルテールが階級闘争的な面に介入し始めるなかで、明白な批判、中傷をデュ・パンは行なっていくことになる。フランス文化は文化面にとどまる限りにおいて、彼ら上層階級の人々の間で受け入れられるようである。

逆に言えば、文化が別のコンテキストに移されて使用される場合もある。別の枠組みをはめられるのである。実際ルソーのテキストは、演劇論というスタイルを越え、そこに含まれていく共同体論などのためもあって、政治的なコンテキストで読まれていく。ジュネーブ内部の身分階級闘争の時にあって、庶民層が依拠するのはルソーのテキストであり、そこに自分たちの闘争のための指針を読みとろうとしたのである。これはもちろんルソー自らが意識したことでないが、ルソーの思惑を越えてテキストが読まれていくプロセスを示しているかもしれない。

(3) **表象の力**——あらゆる事象は、そのコンテクストとともに、読まれるべき対象となる。立ち現れた表象に向けて、人々の解釈作業が作動する。ダミヤン事件も単なる国王暗殺未遂事件ではない。出来事自体の重要性もさることながら、この異常な事態が喚起していく様々なイメージも重要であるし、またそれに付随して起こる些細なエピソード群にも目を向けねばならない。なぜならば、そうした諸要素の集合こそ、その事件が生起した文化空間の状況を示す貴重な指標だからである。

7年戦争でフランスと英国が対立しあう状況、政界ではボンパドゥール夫人が少なからぬ力を示す。そして宗教的問題に端を発した高等法院と王権との対立もフランスの大きな問題であった。不安定な情勢の中で、イエズス会の活動もみられた。ダミヤンの事件が起こるのは、そうした混沌の中であった。動乱の中で人々は整合性を求めて、様々なイメージ表象を作り上げようとしていた。

ルソーとダミヤンが遭遇するとしても、そうした文化空間を前提にした上での話である。両者は決して実際には出会っていない。ただルソーが晩年の書簡において妄想的なヴィジョンを語る。そして彼を取り巻く「陰謀」について弾劾しようとする。そうした彼の解釈創造過程の中で現れるのが、ダミヤンなのである。事件直後ではなく、後になって突如現れてくるこの国王暗殺未遂者のイメージをどう捉えるべきなのであろうか。精神病的なコンテクストではなく、当時の表象として生きられたダミヤンという存在を追求していく作業が、今課せられている。同時代人がこの事件から何を読みとろうとしたのかを踏まえた上で、ルソーの抱くヴィジョンの独自性が検証されるべきであらう。その解読作業が残されている。

註

- 1) 近代化というテーマについては、現代フランス哲学者であるミシェル・フーコーも関心を持って追求してきた。フーコーの資料については、パリの IMEC (Institut mémoire de l'édition contemporaine) に収蔵されている資料の閲覧および講義テープの聴取を行った。その調査については、また別の機会に述べることにしたい。

- 2) Graham GARNETT, *Jacob Vernet, Geneva, and the philosophes*, Oxford: Voltaire Foundation, 1994.
- 3) *Correspondance littéraire, philosophique et critique par Grimm, Diderot, Raynal, Meister, etc.*, Paris: Garnier Frères, 1877-1882 [t. IV, 1878]. マルモンテルについては、特に以下のものが『ダランベール氏への手紙』については、参考になる——MARMONTEL, *Œuvres complètes*, vol. 1-7. Genève: Slatkine Reprints, 1968.
- 4) Jean Le Rond D'ALEMBERT, *Lettre à M. J.-J. Rousseau sur l'article Genève tiré du VII^e volume de l'Encyclopédie...*, Amsterdam: Chez Zacharie Chate-lain et fils, 1759.
- 5) *Ordonnances somptuaires de la République de Genève concernant les habits, ameublements, mariages, etc.*, Genève: Chez Les Frères de Tournes, 1747.
- 6) Paul CHAPONNIÈRE, *Voltaire chez les calvinistes*, Genève: Éditions du journal de Genève, 1932; Paul-Louis LADAME, *Un épisode des relations de Voltaire avec Genève*, Genève: Libr. A. Jullien, 1912; Louis THOMAS, *Genève, Rousseau et Voltaire, 1755-1778*, Genève: Imprimerie du journal de Genève, 1902.
- 7) E. RIVOIRE, *Bibliographie historique de Genève au XVIII^e siècle. Mémoires et Documents publiés par la société d'histoire et d'archéologie de Genève*, Genève: J. Julien, Georg et Cie, 1897.
- 8) Edouard CHAPUISA, *Salons et chancelleries au XVIII^e siècle. D'après la correspondance du conseiller J.-L. Du Pan*, Lausanne: Libr. Payot, 1943.
- 9) *Lettres adressées à J. Vernet 1748-1770*, Ms. fr. 296.
- 10) またデュ・パンの書簡集からもジュネーブという都市の複合性、および階級間闘争の様子を知ることができる。庶民階層の指導者と接近していくヴォルテールに対し、デュ・パンの態度が変化していく様子については、1765年12月19日の書簡および、註6のシャボニエール前掲書150頁以下を参照。
- 11) 演劇論的なコンテクストおよびダミヤン事件の影響については、これまでも筆者は別の方向から論じてきた。それについては、以下の拙論を参照——「18世紀の権力空間論——『演劇に関するダランベール氏への手紙』をめぐる——」、『ステラ』第17号、九州大学フランス語フランス文学研究会、1996年6月、65-66頁；「イメージ表象分析の試み——ドンキホーテ、ルソー、ダミヤン——」、同第18号、1999年6月、61-62頁。
- 12) P. CAFFARO, *Lettre d'un théologien en faveur des spectacles*, Lille: Chez Leleux, 1826; BOSSUET, *Maximes et réflexions sur la comédie, procédées de la lettre au P. Caffaro et de deux lettres de ce religieux, suivie d'une épître en vers adressée à Bossuet*. Nouvelle éd., Paris: E. Belin, 1881.
- 13) Abbé Jean-Baptiste DU BOS, *Réflexions critiques sur la poésie et sur la*

- peinture*, Genève: Slatkine Reprints, 1993.
- 14) 作品に付された演劇論としては、下記参照——LA MOTTE, *Second discours à l'occasion de la tragédie de Romulus*, in *Œuvres complètes*, Genève: Slatkine Reprints, 18970, t. IV, pp.134-190; *Quatrième discours à l'occasion de la tragédie d'Edipe*, *ibid.*, pp.376-396. 演ずる立場を重視したものとしては、下記参照——Pierre REMOND DE SAINTE-ALBINE, *Le comédien*, Paris: Desaint et Saillant, Vincent fils, 1747; François RICCOBONI, *L'art du théâtre*, Paris, 1750.
 - 15) François-Antoine CHEVRIER, *Observations sur le théâtre; dans lesquelles on examine avec impartialité l'état actuel des spectacles de Paris*, Paris, 1755.
 - 16) ここにも前述のダランベールの本が所蔵されている。また批判の中でも、代表的なものとしては以下のものがある——Paul-Antoine NOLIVOS SAINT-CYR (P.A. LAVAL), *Comédien, à M. J-J.Rousseau, citoyen de Genève, sur les raisons qu'il expose pour réfuter M. d'Alembert, qui dans le VII^e volume de l'Encyclopédie, article de Genève, prouve que l'établissement d'une comédie dans cette ville y feroit réunir la sagesse de Lacédemone à la politesse d'Athène*, A La Haye, 1758.
 - 17) リプリント版でいえば、演劇論で重要なものとしてニコルのものがある——Pierre NICOLE, *Traité de la comédie et autres pièces d'un procès de théâtre*, Paris: Honoré Champion, 1998. またデュ・ボスのテキストに詳しい註を加えた現代版もある——Abbé Jean-Baptiste DU BOS, *Réflexions critiques sur la poésie et sur la peinture*, Paris: École nationale supérieure des beaux-arts, 1993.
 - 18) Pierre RÉTAT (dir.), *L'attentat de Damiens. Discours sur l'événement au XVIII^e siècle*, Lyon: Presses Universitaires de Lyon, 1979.
 - 19) Dale K. VAN KLEY, *The Damiens affair and the unraveling of the ancien régime, 1750-1770*, Princeton: Princeton University Press, 1984; Pierre CHEVALLIER, *Les régicides. Clément, Ravallac, Damiens*, Paris: Fayard, 1989.
 - 20) LE BRETON, *Pièces originales et procédures du procès fait à Damiens tant en la prévôté de l'hôtel qu'en la cour de Parlement*, Paris: P.G. Simon, 1757.
 - 21) François RAVAISSON, *Archives de Bastille. Documents inédits recueillis et publiés*, Paris: A. Durand et Pedone-Lauriel, t. XVI (1884) et XVII (1891).
 - 22) *Ode sur la blessure et la convalescence du roi. La France sauvée.*
 - 23) 特に以下の作品が有名である。——*Réflexions sur l'attentat commis le 5 janvier contre la vie du Roi*, [daté «ce 5 mars 1757»]; *Le patriote ou anecdotes secrètes sur l'assassinat de Sa Majesté, le Roy de France, commis par le détestable Damien, avec des réflexions à la fin*, Kim-Te-Tchim, 1759; *Les Iniquités découvertes, ou recueil de pièces, curieuses et rares qui ont paru lors du procès de Damiens*, Londres, 1760.

- 24) ダミヤンの生涯については、ル・ブルトン前掲書および下記参照——*Vie de Robert-François Damiens*, Paris, 1757. また当時のメディアの報道の仕方については、上記 *Les Iniquités découvertes...* の中の Récit historique に *Gazette d'Amsterdam* の記事の一部が採録されている。
- 25) *Archives de Bastille*, Manuscrits N^{os} 11979 (618 ff) et 12498.
- 26) *Annonces, affiches et avis divers* (À la fin du numéro: «À Paris, du bureau d'adresse, aux galeries du Louvre, vis-à-vis la rue S. Thomas. Avec privilège du Roi»); *Gazette d'Hollande*, avec privilège de Nos Seigneurs les États de Hollande et West-Frise (À la fin du numéro: «À Amsterdam, par le St C.T. Du Breuil»); *Gazette d'Utrecht* (À la fin du numéro: «À Utrecht, par le sieur Henri François Limiers»).
- 27) Melissa BUTLER (éd.), *Rousseau on Arts and Politics. Autour de la Lettre à d'Alembert - Colloque Wabash College 1995, Pensée Libre n° 6*, Ottawa: Association nord-américaine des études Jean-Jacques Rousseau, 1997; Jean-Claude BONNET, «Jean-Jacques et les spectacles», *Études Jean-Jacques Rousseau 1*, 1987, pp. 125-138; Patrick COLEMAN, *Rousseau's political imagination*, Genève: Droz, 1984; Paul HOFFMANN, «D'Alembert et Marmontel, lecteurs de la Lettre à d'Alembert sur les spectacles», *Travaux de Linguistique et de Littérature*, 1976, pp. 71-77; J. H. MASON, «The Lettre à d'Alembert and its place in Rousseau's thought», *Rousseau and the eighteenth century*, Oxford: Voltaire Foundation, 1992, pp. 251-269; Robert POLITZER, «Rousseau on the theatre and the actors», *The Romanic Review*, t. XLVI, 1955, pp. 250-257.
- 28) Marquis DE MEZIERES BÉTHISY (Eugène Eléonore de), *Critique d'un livre contre les spectacles intitulé J.-J. Rousseau, citoyen de Genève à M. d'Alembert*, Amsterdam, 1760.